

【連載】

## エネルギーのはなし 第3編 (その3)

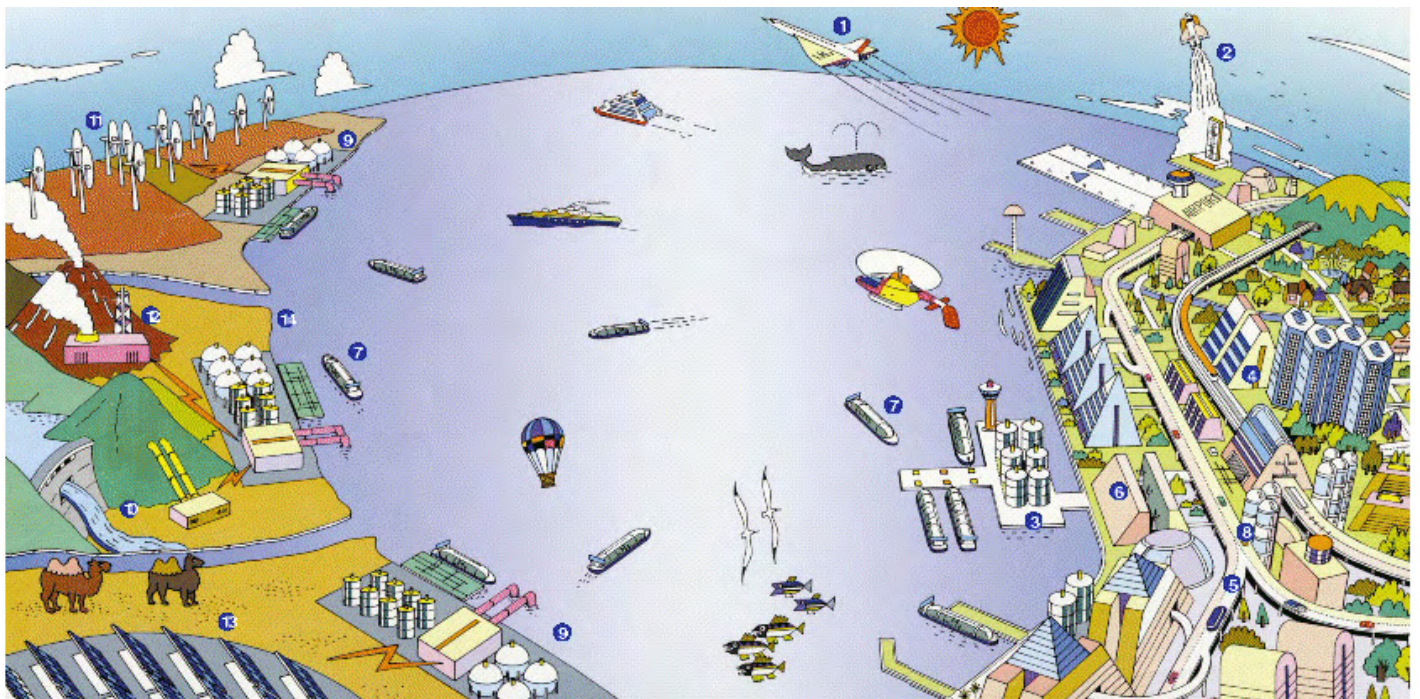
藤川 卓爾 (昭和42年卒)

出典: 「火力原子力発電」第60巻、第2号、2009-2、pp.32 ~ 40

発行: 火力原子力発電技術協会

### 5. 仮設 : 水素エネルギー<sup>8)</sup>

水素は燃焼によって大きなエネルギーを発生し、しかも二酸化炭素を排出しないので、地球温暖化問題を引き起こすことのない理想的な燃料である。この特徴により、今世紀半ば以降は電気とともに2次エネルギーの中心となるものと期待されている。現在は大部分の水素は化石燃料から製造されているが、化石燃料がなくなっても、水



水素飛行機	水素ロケット	水素貯蔵タンク	エネルギー消費地
水素バス	水素燃料発電所	水素輸送タンカー	水素自動車
水素製造プラント	水力発電所	風力発電所	地熱発電所

図10 水素エネルギー社会 [出典]新エネルギー・産業技術総合開発機構

HP: [http://www.nedo.go.jp/kankobutsu/nenshi/3color/2000\\_2001/shinsyo/suiso.pdf](http://www.nedo.go.jp/kankobutsu/nenshi/3color/2000_2001/shinsyo/suiso.pdf)

力,地熱,風力,太陽光等の自然エネルギーを利用して発電した電力で水を電気分解することにより水素ができる。一般に,自然エネルギーが豊富な場所と,エネルギーの消費地は遠く離れていることが多いので,その間は,水素を冷却して液体水素にしてタンカーで輸送するか,気体のまま長距離のパイプラインで送ることになる。

消費地では,水素を燃料として燃料電池によって発電する。また,水素・酸素燃焼タービンも開発中である。水素を燃料として酸素と反応させるガスタービンは,発生するガスが水蒸気のみなのでガスタービンであるのと同時に蒸気タービンでもある。前回の(その2)<sup>2)</sup>の3.2節で述べた複合発電サイクルはガスタービンと蒸気タービンの二つのタービンが必要であったが,水素・酸素燃焼タービンでは排熱回収ボイラが不要で一つのタービンで複合発電が可能となる。

燃料電池にしても,水素・酸素燃焼タービンにしても高効率で無公害発電ができる。新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO: New Energy and Industrial Technology Development Organization)では水素エネルギー利用技術開発のためにWE-NETプロジェクトを実施した<sup>9),10)</sup>。図10にWE-NETプロジェクトで描かれた将来の「水素エネルギー社会」<sup>11)</sup>を示す。

#### <参考文献>

- 8) 清水 明,藤川 卓爾:水素エネルギー社会に向けて,長崎総合科学大学紀要,第47巻,第1号,pp.1-15.(2006-9)
- 9) 新エネルギー・産業技術総合開発機構:水素利用国際クリーンエネルギー技術,International Clean Energy Network Using Hydrogen Conversion ,(1995-1)
- 10) 新エネルギー・産業技術総合開発機構:水素利用国際クリーンエネルギーシステム技術(WE - NET),第二期研究開発報告書 ,(2002)
- 11) 新エネルギー・産業技術総合開発機構 HP : [http://www.nedo.go.jp/kankobutsu/nenshi/3color/2000\\_2001/shinsyo/suiso.pdf](http://www.nedo.go.jp/kankobutsu/nenshi/3color/2000_2001/shinsyo/suiso.pdf)

(つづく)

## —— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

### 【要領】

宛先は京機会の e-mail : [jimukyoku@keikikai.jp](mailto:jimukyoku@keikikai.jp) です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願い致します。



2009年11月13～14日開催

## 京都大学東京オフィス開所記念イベントと 京機会 1972年卒同窓会についてのご報告

本田 博 (1972卒 河本研究室)

11月13日(金)午後6時～8時半と11月14日(土)午後1時半～4時に、京都大学東京オフィスにおいて開催された標記の記念イベントの案内が、工学部同窓会松久寛事務局長から京機会関東支部の会員にもあったので、筆者は両日のイベントに参加した。また、同オフィス関係者のご厚意により、イベント終了後の11月14日午後6時から8時まで、同オフィスで(2008年11月の京機会総会の折、1972年卒関係者より東京で開催するよう要請のあった)標記の同窓会を開催させていただいたので、この場を借りて報告させていただきます。

11月13日には、1955年に木原均隊長が率いたカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊と、1958年に桑原武夫隊長が率いたカラコルム山脈チョゴリザ峰登頂隊の短縮版フィルムの上映があり、その鮮明な画像が印象的であった。

引き続き、司会の澤田芳郎教授より、1955年当時、(1960年代後半以降に発展した)プレートテクトニクス理論がなかった中で、カラコルム山系の地質の克明な記録、その氷河との関わり、小麦の祖先の調査などを行う為、民間企業からの寄付も含め1600万円の経費を掛けて行った学術探検にまつわる話があった。その後、傑出したリーダーであり、生態学・文化人類学者であった今西錦司教授が、深い洞察の元に、ある日突然、カラコルム・ヒンズークシ学術探検を止める決断を下し、アフリカにおける類人猿の研究へと転じる一方で、桑原武夫氏を説得し、朝日新聞社・他1社からの120万円の寄付を含む950万円の経費を掛けて、京都大学学士山岳会(Academic Alpine Club Kyoto (AACK))による152名のキャラバン隊を率いたチョゴリザ登頂を実現させた話などが紹介された。

京都大学学術探検隊によるフィールド科学研究活動の源流は1930年代に遡り、中国/北朝鮮国境沿いの白頭山の後、蒙古、ミクロネシア連邦ポナペ島、大サハラ、その他へと拡張し、研究分野も、民族生物学、南極観測、霊長類学、文化人類学、フィールド医学、その他に及ぶ幅広いものである事などが紹介された。ヒマラヤ山脈・カラコルム山脈の登頂は、1950年にフランス隊がアンナプルナ登頂に成功して以来、イギリス隊によるエベレスト、ドイツ隊によるナンガ・パルバット、イタリア隊によるK2、1956年の日本隊によるマナスル登頂へと続き、山岳登頂ブームに沸く中で、1958年には、上述のAACKが、単独大学としては世界で初めての7000m峰初登頂であるチョゴリザ登頂に成功した。

この後のパネルセッションでは、チョゴリザ登頂に参加し、山頂に到達した神戸大学平井一正名誉教授(システム工学専攻)と、これを後方で支えた京都大学高村泰雄名誉教授(アフリカ地域研究センター)をパネリストとする講演があった。平井氏より、アイストームを越えた後の下りが怖かった事、アイゼンが岩に軋む音の記憶が今も鮮明である事、墜落死したオーストリア人のヘルマン・ブールの遺品を回収して、イタリア隊に引き渡した話など、当時の思い出話が披露された。高村氏からは、高校3年の時に日本アルプスを登り、山岳部活動の盛んな北大への進学を考えていたが、1952年12月～53年1月の京大山岳部知床山脈初縦走のニュースを知って京大進学を決意した事、チョゴリザ登頂の後、1961年にはパキスタン調査を担当し研究を進めた事、リーダーシップやチームワークを発揮する方法を考えた事など Science を行う上での経験談が披露された。

1～2の質問を受け付けていただいたので、前述の高峰の登頂は、先進国の登山家にとっては初登頂であっても、現地の人には既に登っていた話などは地元でなかったか、今後、留学生30万人計画の元に、同地域からの海外留学生が増えれば、文化人類学や関連分野の研究が相当に進むのではないかとの質問を行った所、平井氏より、現地の人には、山羊を飼ったりして生計を立てており、とても登れるような峰ではなかった事、神戸大学留学生センターでも、当該質問に関連する活動を行っているとの回答があった。他の京機会会員の方から、雪男は見なかったかとの質問があったが、肯定的な回答はなかった。

11月14日には、「京都大学と学術映像：記録の保存に向けて」と題する講演会と映像上映があった。まず、京都大学田中耕司地域研究統合情報センター長より、「研究資源アーカイブ映像ステーションと学術映像」と題する講演があり、インドネシアにおける学術探検や水田開発と稲作などの海外フィールドワークに関する活動が映像を通じて紹介され、今西錦司教授によるミクロネシアでの研究活動の話などにも言及があった。京都大学では、研究資源の収集と保存に力を入れているが、若者はその為のノウハウを十分に持っていること、学術映像の国際コンペに227作品が応募した事、コピーライト上の問題点、研究資源活用の重要性などについての説明があった。

引き続き「学術映像の紹介と上映」と題するセッションで、山中一郎前京都大学総合博物館長による「征夷大將軍坂上田村麻呂の墓」、九後太一前京都大学基礎物理学研究所長による「湯川秀樹 その人」、田中耕司教授による「道は開ける - 石井米雄と東南アジア研究」と題する映像を活用しての講演があった。

考古学専攻の山中名誉教授の講演では、坂上田村麻呂の墓と西野山古墓の位置関係、太刀と鏡の話、硯の形が時代を表示している事等の話題提供があった。

九後教授の講演では、1918年のプランクのノーベル賞受賞以降に進展した素粒子物理学における湯川博士の中間子理論の意味や位置付け等が説明された。

田中教授の講演では、石井米雄は、アジアの歴史をきっちりと解明していく上での開拓者であった事、とりわけタイを肌で研究しなければならないと考え、27歳の時より足掛け7年、同地に住んで研究を進めた事などの紹介があった。映像の中で、石井教授より「京都大学で分野間を越えた複数の学者による共同研究が進んだ事は、本学の特徴であり、伝統的な文化である。」との発言があり、米国人文学者の「自然科学者とどうしたら話を進められるのか。」との質問に対し、「面白い話をすればええんや。」と答えたとのエピソード等が紹介された。

1～2の質問をする機会が与えられたので、「本年7月の学士会の会合で、益川敏英京都大学名誉教授より、湯川博士には、トップダウン的に"志の高い"とする自らの構想(理論)を押し付けられる所があったという話を聞かされたが、湯川博士の研究所長としての側面をご教示いただきたい。」との発言をした。九後教授より、その構想は、後に新しい理論に発展した可能性があり、天体物理学、生物物理学、プラズマの研究などを若手研究者に奨励され、素粒子物理学以外の分野でも、発展を促される功績があったとの回答があった。

田中教授の講演で紹介された映像における前述の石井教授の発言については、機械工学においては日本よりむしろアメリカ機械学会の方がMultidisciplinary的なアプローチが強調され、盛んである事を指摘し、同教授が進めているような地域に関する共同研究においては、工学も途上国の産業に合ったフロンティアについての研究等を進める上で大きな役割を果たしうるので、組み入れるべき事等をコメントしたが、工学部との間に壁が存在するように感じ取れた。

最後に、上述の3教授及び五島敏芳京都大学総合博物館講師と元木環京都大学メディアセンター助教による「研究資源のアーカイブ化をめぐる」と題するパネルセッションがあり、記録に残るように資料を残すべき事、誰に何をどのように見せるかのコンセプトを作る事は面倒であるが重要である事、資料の保存に際して、特に科研費を使ったものについては著作権上の問題がある事、誰(研究者か、一般大衆か)を対象にするのかを考える必要がある事、デジタル化したデータの保存を進めるべき事などが発言された。

最後の質疑応答セッションの際、産業考古学が扱う産業遺産や機械遺産について、博物館は、どのような方針で扱うのかと質問した所、産業考古学では、産業革命以降の機械遺産が対象なので、京大博物館では取り扱っていないとの回答があっ

た。産業遺産については、佐渡金山の遺跡や、たたら製鉄の遺跡など産業革命以前の物も対象にしているのではとの指摘をしたが、工学部が関係する遺産には、同博物館が手を出しにくい事情があるようであった。京機会 1973 年卒の池内克史東大教授が、文化遺産に対して適用しているような高精細のデジタル化技術を取り込んでいるのかとの質問には、セッション終了後、元木助教より、同教授の論文等を読んで、知っているとの回答があった。

イベント全体を振り返ってみた所感として、工学部も面白いイベントを主催できそうだと思われた事、また、今後、工学部独自で学術記録の保存を行っていく為の確固たる方針があるのか、或いは、全学レベルの博物館に部分的にでも統合化していくのか、そのあたりを明らかにする必要があるように思われた。

京機会 1972 年卒同窓会については、同日、京都大学において Homecoming のイベントがあった事や Short Notice であった事などにより、関西以西からの参加者はなく、総勢 9 名ではあったが、名古屋市や栃木県など遠方からの参加者があり、時折、美しい夜景を観賞しながら、和気藹々とした雰囲気の中で歓談した。

今後、誰にでも気軽に参加できるような日常的なテーマで、昼間にシンポジウムを開き、夕方から懇親会を行うような同窓会があっても良いし、シンポジウム・プロシーディングスなどを発行すると記念にもなると思われるが、他に、アイデアやご意見等があれば、hiroshi-h@wave.plala.or.jp まで、御一報下さい。



## S42 年同期会行事報告

藤川 卓爾（京機会 S42 学年代表幹事）

学部卒業 42 周年、修士修了 40 周年を記念して、平成 21 年 11 月 21 日(土)～22 日(日)に、S42 年同期会行事「竹生島クルーズ」を実施しました。

琵琶湖周航の歌の「今日は今津か長浜か」の歌詞のとおり、近江今津から竹生島を経由して長浜まで琵琶湖汽船のクルーザーで横断しました。竹生島には約 1 時間上陸し、弁財天をお祭りしてある宝巖寺と都久夫須麻神社にお参りしました。夕刻、長浜に到着したあと、天然鴨料理の「住茂登」にて鴨鍋を囲んで懇親会をしました。



船上より望む竹生島

関東支部から、長崎、林、間瀬、元木、中部支部から、渡辺、関西支部から、側島、中野、堀家、吉野、中国・四国支部から、佐々木、吉田、九州支部から、藤川が出席し、同期生 12 名と家族 2 名の計 14 名の盛会になりました。



「住茂登」にて

出席者： 佐々木 俊輔、側島 克信、長崎 啓、中野 善文、林 正広、藤川 卓爾、順子、堀家 弘、間瀬 俊明、元木 敏雄、吉田 紀元、吉野 隆、渡辺 治男、薫

翌日は、有志で、大通寺や黒壁スクエアなど、長浜の歴史探訪をしたあと、JRで高月まで北に3駅足を伸ばし、渡岸寺観音堂の十一面観音像を拝観してその美しい姿に心を洗われました。 観音堂近くの「渡岸寺庵」で山菜そばの昼食後、再会を約して別れました。



大通寺門前通りにて

## 清風荘サロンのご案内

現役学生と京大教職員，京機会会員に，自分の時間をゆっくりと過ごす場所と時間を提供します． 清風荘は京大が管理する西園寺公望の元京都別邸で，名工・八木甚兵衛氏の手になるものです．ふだんは非公開の施設です．

(参考 <http://tomitaken.seesaa.net/article/122466796.html>)

参加者にはお互いの名簿と名札をお渡ししますので，声をかけあって三々五々情報交換の円座を囲ってもよし，庭園を散策されても，また読書をされたり，勉学，研究等の構想を練られるのも良いと思います． 強制はしませんが，第2会合室にてテーマ歓談と簡単なストレッチ体操を行いますので，ぜひご参加下さい．

(なお、文化財であるため建物の保全には細心の注意をお願いいたします． 0B参加者は京機会会員に限らせていただきます．)



名 称 「清風荘学生サロン」

<http://www.keikikai.jp/honbu/gyouji/gakuseisaron.html>

歓談テーマ：「学位って必要？」

日 時： 12月11日(金)(毎月第2金曜日), 14:50~16:40

場 所： 清風荘, 第二会合室, 庭園, 及び茶室

参加者： 京都大学に在籍する学部学生, 大学院生, 京都大学教職員.  
京機会会員

(参加希望者は開催日前日までに, 松田優子(yuko118@iic.kyoto-u.ac.jp)までメールでご連絡下さい。メールには氏名, 所属, 連絡先と共に, 自分を紹介する2, 3行の単文をご記入下さい。参加者名簿は当日お配りします。)

(問い合わせ先：)

富田 直秀 [ntomita@iic.kyoto-u.ac.jp](mailto:ntomita@iic.kyoto-u.ac.jp)

京都大学工学研究科 バイオエンジニアリング講座、医療工学

〒606-8501 京都市左京区吉田本町, 工学部物理系校舎

(秘書：松田優子：075-753-9201)

## INFO

詳細はPDF版でご覧下さい。

### 1. ジャパン・ペシミズムの理由

溜池通信 vol.431 Biweekly Newsletter November 27, 2009

双日総合研究所

吉崎達彦

<http://www.sojitz-soken.com/jp/send/tameike/pdf/tame431.pdf>

新興国経済は軒並みに活況を呈し、豪州などではすでに利上げが始まりました。米国経済もプラス成長軌道に乗り、世界経済は随所で明るさが見え始めています。ところが日本ではむしろ悲観論が優勢で、「二番底」や「デフレ」の懸念が語られています。世界の株価を見渡せば「日本株の出遅れ」が一目瞭然です。

現在の悲観ムードは、単に政治経済の先行き不透明という短期の問題ではなく、少子・高齢化の進行や「中国に抜かれてしまう」ことへの懸念など、長期的、構造的な問題によるところが大なのでしょう。しかし「悲観は気分、楽観は意思」とも言うではありませんか。今のペシミズムも、「半分は納得するが、半分は異議あり」

と筆者は考えています。

\*\*\*\*\*Contents\*\*\*\*\*

特集：ジャパン・ペシミズムの理由 1p

<今週の "The Economist" 誌から >

"Scaling the Asian wall" 「アジアの壁をよじ登る」 7p

< From the Editor > 抹茶アイスの謎 8p

\*\*\*\*\*

## 2 . 高齢化は脅威か？ 鍵握る向こう10年の生産性向上

総合研究開発機構 NIRA 研究報告書 2009/11 発行

[http://www.nira.or.jp/outgoing/report/entry/n091127\\_412.html](http://www.nira.or.jp/outgoing/report/entry/n091127_412.html)

人口減少と高齢化が日本経済の懸念材料であると強調されて久しい。高齢者の増加は、社会保障収支の悪化を通じて財政赤字を趨勢的に拡大させるだけでなく、生産性を押し下げ、経済の活力をそぐのではないか、という見方である。このうち、後者の「高齢化の進展や人口の減少が、日本経済の生産性の先行きにどのような影響を与えるのか」という疑問に答えることが本報告書の主目的である。

エグゼクティブサマリー <http://www.nira.or.jp/pdf/0905summary.pdf>

研究報告書（全文） <http://www.nira.or.jp/pdf/0905report.pdf>

目次

第1章 問題意識と要旨 白川浩道

[http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_1.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_1.pdf)

BOX1 生産性について 加藤久和 [http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_box1.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_box1.pdf)

BOX2 就業者年齢と生産性に関するサーベイ

宮澤健介 [http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_box2.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_box2.pdf)

第2章 人口と技術進歩に関する実証分析

加藤久和 [http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_2.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_2.pdf)

第3章 就業者年齢と生産性、実質賃金に関する実証分析

白川浩道 [http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_3.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_3.pdf)

第4章 年齢区分でみた労働生産性の推計

神野真敏 [http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_4.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_4.pdf)

第5章 高齢化と若年雇用：その連関の再検討

太田聡一 [http://www.nira.or.jp/pdf/0905report\\_5.pdf](http://www.nira.or.jp/pdf/0905report_5.pdf)

執筆者一覧

白川浩道 クレディ・スイス証券経済調査部長 /NIRA 客員研究員（座長）

太田聡一 慶應義塾大学経済学部教授

加藤久和 明治大学経済学部教授

宮澤健介 東京大学大学院経済学研究科博士課程

神野真敏 NIRA 研究調査部ジュニアリサーチフェロー



## フットサル大会

SMILE 運営委員 大山勇己

[o.yuuki@ky7.ecs.kyoto-u.ac.jp](mailto:o.yuuki@ky7.ecs.kyoto-u.ac.jp)

京機学生会執行部 SMILE は、2009 年 10 月 31 日の 17 時～19 時、スポーツ大会を開催した。この大会は、普段、学年を跨いでの交流の少ない機械系学生の皆さんが気軽に参加でき、交流を深める機会を設けることを目的として行った。

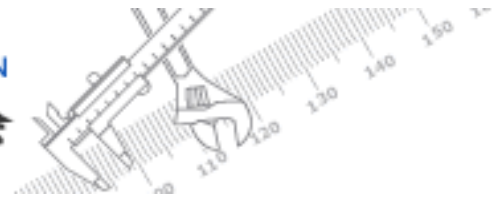


機械系の学生を中心に、50 名を超える人数に参加してもらい、普段はなかなか言葉を交わす機会の少ない方同士もスポーツを通じてともに汗を流すことで、言葉を交わす以上の交流を持つことが出来たのではないかと思う。試合数を重ねるにつれて、大会の熱気が増していき、対戦チーム以外からも自然と声援があがっていました。大会中、思わず手に汗握る場面が何度もあったが、特に決勝戦の盛り上がりは特筆すべきものがあった。

大会終了後、参加者の方に直接感謝の言葉を貰えたことが主催者としての一番の喜びとなり、大会後のアンケートでも、「満足した」、「次回もスポーツ大会があれば参加したい」という声が多くあった。SMILE としては、今後もこのような大会を定期的 to 開催することを検討していきたい。







## 報告

去る11月28日(土)、京都大学時計台の国際交流ホールにて開催されました京機会主催の「学生と先輩の交流会」に参加してまいりました。今回はその報告とお礼、そして私たち KART の近況報告（走行会）をいたします。

### ■交流会・懇親会に参加いたしました

毎年、機械系0B・0Gの方々が多数いらっしゃいます交流会に今年度も参加お手伝いをしました。さらに、交流会開催中は昨年度車両 YJ-R07 を、時計台の前に展示させていただきました。あいにくの曇り空でしたが、マシンを展示しております京機会テントに多数の方々に足を運んでいただきました。



時計台前の京機会テントにて展示中の YJ-R07

昨年度の不甲斐無い結果にお叱りの言葉を頂戴したり、今年度こそ頑張るよう応援していただいたりと、たくさんお声をかけていただきましたが、「京都大学機械系の学生ならば……」という期待の大きさを改めて感じました。それと同時に数多くの皆様に応援していただいていることも強く実感いたしました。

その後行われました懇親会におきまして、私たちは昨年度の成績発表を行い、今年度の進捗状況を報告した上で、皆様にサポーターとしての支援をお願いさせていただきました。ご談笑中に KART メンバーがお邪魔したことも多かったと存じますが、多数の方々がサポーターとして名乗りをあげて下さりました。大勢の方々に私どもの話を聞いていただき、応援のメッセージをいただけたのは何よりの収穫でした。お世話になりました皆様には厚く御礼申し上げます。

京都大学機械系の名に恥じぬような成績を必ずや残して見せますので、今後とも温かいご声援のほどよろしくお願い申し上げます。

## ■ KART 走行会報告

皆様のご支援はKARTの成長の糧として大切にさせていただいております。特にその成長を確認する上で重要になってくるのが走行会です。今月も製作の合間を縫って走行会に行っていましたので、その様子を報告いたします。

昨年度車両YJ-R07を使用する走行会は、主に、奈良県にあります名阪スポーツランド様で行っております。現在の走行会の主な目的は「データの収集」と「新規パーツのテスト」です。

データ収集としては、「YJ-R07の限界性能を把握する」ということで、昨年度中に性能を引き出し切れなかったYJ-R07の車両性能の確認を行っております。これは、昨年度車両のいわば「復習」で、得られたデータを今年度車両にフィードバックしていくことを目的としています。例えば、今回は徐々に加速しながら定常円旋回を行うことで、サスペンションの限界性能を確認いたしました。

新規パーツのテストは主にエンジン回りの部品で行っております。データ収集が「復習」ならば、新規パーツのテストは「予習」ということで、今年度車両に搭載候補として挙がっているパーツの性能評価を目的としています。今までに潤滑油のタンクを始めとして、吸気管やサージタンクの試験を行ってきました。今回は空気流入量を調整するスロットルの内径を変えたものを搭載して走行しました。結果は上々で、ドライバーからも好評価を得ることができました。ここで得られたデータをもとに、今年度車両の設計に少しずつ手を加えていきます。

また、忘れてはならないもう一つの目的がドライバーの育成です。車両自体の性能向上も欠かせませんが、その性能を最大限に引き出すのはやはりドライバーの役目になります。自らが製作した車両を乗りこなすべく、ドライバーたちが走行会の機会を利用して腕を磨いています。

学生フォーミュラ大会で栄冠を勝ち得るために、私たちの努力は今日も続いています。



走行会で試験した新しいスロットルボディ



名阪スポーツランドを疾走する YJ-R07